

令和5年度 認知症初期集中支援チーム 活動報告

(R5年6月30日現在)

	No.	性別	年齢	初回相談者	相談経路	支援開始	支援終了	診断名	対応結果
令和4年度からの継続事例	1	女	75	家族	地域包括支援センター	R4年12月	R5年4月	—	もの盗られ妄想が強く、家族は医療機関受診を希望するが、本人は受診の必要性を感じていない状況であった。本人との信頼関係を築きながら訪問を実施。生活状況等の把握ができ、担当包括が単独で訪問することも可能となった。しかし、受診については、身体的不調がなく、本人が全く必要としていないことから、集中的に関わることで支援者との関係性を悪化させることが懸念された。そこで、担当包括、家族と相談し、現時点で本人の生活は保たれており、医療機関受診については長期的な支援を見通して、チーム員の関わりは一旦終了とし、担当包括による見守りと家族支援を継続しながら、必要なタイミングで再介入する。
	2	女	83	家族	地域包括支援センター	R5年1月	R5年5月	アルツハイマー型認知症	同じものを大量に購入する等、金銭管理に支障が出ている。遠方に住む家族を含め、担当包括や権利擁護センターとも連携し、適切な金銭管理や今後の生活について検討した。带状疱疹による不調を期に本人の意向に変化があり、実姉が通うデイサービスへの継続利用ができるようになった。そのため、担当包括へ引き継ぎ、チームとしての関わりは終了した。
	3	女	83	友人	地域包括支援センター	R5年1月	R5年4月	—	半年前から入浴や着替えができておらず、もの忘れの症状もみられる。長年の友人より、介護サービスを利用し生活を整えられないかとの相談があり支援開始。本人との信頼関係を築きながら、生活や受診状況の確認をし、キーパーソンとなる家族との連携が必要と判断したため連絡をしたところ、家族からの強い支援拒否を受けた。本人もチームが提案する支援は拒まれるため、チームの継続支援が困難な状況となる。今後は、担当包括が見守りながら介入のきっかけを探し、高齢者実態調査のタイミングに合わせて訪問予定。必要なタイミングでチームが再介入する。
令和5年度新規事例	1	女	83	家族	地域包括支援センター	R5年6月	支援中	—	もの忘れや物盗られ妄想が約半年前から続いている。さらに、近隣に住む長男の妻へ昼夜問わず頻繁に連絡するため、心身両面での負担が大きく疲弊している。また、定期的な医療受診ができていないため、まずは本人との信頼関係を築きながら受診を促し、デイサービス等の介護保険サービスへ繋ぐことを目標に支援中。

	No.	性別	年齢	初回相談者	相談経路	支援開始	支援終了	診断名	対応結果
令和5年度 新規事例	2	男	91	病院	病院	R5年 6月	支援中	—	糖尿病の治療中だが病識がなく服薬等できていない。治療の必要性も感じておらず、たびたび低血糖発作をおこして救急搬送され入院となるが、認知機能の低下がみられ、せん妄や本人の強い希望で退院となった。まずは、本人の生活状況の確認と必要に応じて環境を整えることを目的に支援中。
	3	女	88	家族	地域 包括 支援 センター	R5年 6月	支援中	—	介護認定はあるが介護保険サービスは未利用。短期記憶の低下や見当識の低下などがみられるほか、希死念慮あり。精神科への受診調整を行うとともに、デイサービス等の利用を促し、同居の娘の心身面の負担軽減もできるよう支援中。